御　　挨　　拶

２０１５．５．２０

一般社団法人くらしのリサーチセンター
代表理事会長　　福　　嶋　　等

当センターは先ほどの社員総会において、今年度の研究の基本テーマを、「人と自然を愛し、学び合い、助け合う社会を目指す」とすることに致しました。

その原理のようなところに少し触れてみます。

１、人間はサルとどこが違うのか。サルは徹底して現実を生き、人間は夢を語るといわれます。人間は未来志向で将来を構想する。つまり理念というものを掲げる動物です。

とすれば、どんな理念が正しいのかが問題となりますが、理念は自然や社会の実態を正しく映したものが望ましい。

２、そうした理念の根拠について、１、２点考えてみますとまず、生物は、個体それ自身は、必ず死ぬものですが、子孫（一部自分）を残すことによって、未来の生命へ自分を繋げていきます。つまり永続が生命の目的、原理です。としますと人間の理念は長期にわたるものが望ましいことになる。

３、生物は実に多様です。地球上の生物は種の数も厖大ですが、種が同じでも生物個体はすべてどこか違っています。それら各個体はそれぞれ自己の環境に適応し、その環境で生き残っている。この生物の多様性が、いくつかの環境が失われても、種が生き残った原因といわれます。つまり生物個体は、いずれも種の存続にとってもかけがえがないものなのです。

４、近代人権宣言においては人間の権利として個人の尊重と自由がうたわれてきていましたが、現代では国連の生物多様性条約で、人間だけでなくあらゆる生物の多様性の価値を認識すべきだとされるに至っています。

「われわれは生きんとする生命にとりかこまれた生きんとする生命である」（シュヴァイツァー）。人間をとり囲む多様な他の生命なしには人間存在もないのです。

５、古代から人類は、「われわれはどこからきたか、われわれはどこへ行くのか」という問いを発してきました。現在の地球上のすべての生命は、３６億年前

に地球上に発生した生命が先祖です。１，０００万～７００万年前直立歩行の人類が誕生し、現生人類のホモ・サピエンスは２０万年前に出現した。
ネアンデルタール人の絶滅には、ホモ・サピエンスが関与したのではないかといわれている。ホモ・サピエンスの残酷な面です。
唯一の現存人類となったホモ・サピエンスは今や７０億を超え、圧倒的な無敵の存在となりました。
いま地球上で多様な生物種がどんどん消滅しています。それは人間の開発行為、地球温暖化などに起因するものです。人類は、地球上のすべての生命の生殺与奪の能力を有するに至っています。人間だけが、地球を救い他の生命を保護できる存在です。人間の使命は重大です。
人間には本来理念の根底として道徳性が備わっており、論理的思考を行うまでもなく、道徳的直観が先立つということも判ってきているようです。国民は情報さえ伝えられれば、道徳的直観によって正しく判断するのです。専門家や知識人、社会の各分野の指導層が動物的現実主義者にとどまることなく、未来志向をもって長期の展望を切り開いていくことがとても大事なことだと思う次第です。儒教には、「社会の木鐸」という言葉があります。社会の木鐸であられる御臨席の皆様方の御指導を心よりお願い申し上げます。